

書 評

『生活に活かす共済と保険』

― 共通する機能と異なる制度を理解する

米山 高生 (東京経済大学教授
大学生協共済連会長) 著

本書では、共済と保険から論じられたものがない。本書では、共済と保険におけるその共通性と相違性について、理論的・歴史のアプローチから明らかにしようとしている。過去に発表されている文献の中で、共済の運動論や理論的アプローチ

から論じられたものがない。第1章では、共済という言葉について、過去の共済が保険と共通していること、相違が見られることをいくつかの切り口から分析を行い、それぞれの特徴から理論的に記述している。

共通性と相違性を理論的・歴史のアプローチで明らかに

第2章では、共済と保険の相違を理論的に考察しており、それらの比較研究をする場合、それぞれの保障という機能と保障を提供する組織を切り離して考えるべきとの立場をとっている。そして、機能的な側面から検証を進めた結論として、保険の諸機能は共済においても基本的に共通だと

古い論文などを丁寧に読み込み、それぞれの考え方を整理しており、共済に携わる者にとっては貴重な資料となる。また、本章の冒頭で、保険・共済を「金融商品」としているものの、割り切れない部分があるとして、なぜ割り切れないかを解説している。そして、その割り切れないさを払拭するため、保険・共済契約は募集や推進において「たすけあい」を引き合いに出さず、契約者の自助手段であることを明確に示すべきと主張していることも興味深い。

き、その後研究を進められてきた。従って、生活にかかるといふ側面を客観的かつ冷静に分析しており、共済と保険いずれかに肩を持つわけがなく、研究を進められてきた成果が誠実にまとめられている。そういう意味でも、保険・共済に関わる方々にとって、一読いただきたい文献である。また、多様性があると論じられていて、各共済団体においても、団体それぞれの役割や存在意義を考える上でも、たいへん参考となる文献であろう。



[評者] 高野 智 (一般社団法人日本共済協会常務理事)

とくに、「わかりにくい共済組織」と題し、共済が共済団体の名称だけでなく、〇〇共済会など広々している名称としてきたが故のわかりにくさであるが、本章の「まとめ」で共済事業を提供する団体について、概念がたいへんわかりやすくまとめている。しかし、保険の事業の一つとして共済が発展する中、幾人もの有識者によりそれぞれの理論から見解が述べられているという歴史的事実があるが、これらの主張が一つにまとめられているものは少なく、筆者が

きるが、それは共済商品によって強弱があるとしても、購買型の協同組合や生産者協同組合などいくつかの事例が紹介されている。そして、保険は標準的かつ均質、共済は多様かつ個別的であり、どちらが優位と決めつけることはできないとし、結論としては、共済は多様性と協同組合事業としての魅力があり、その存在意義としては、人々の生活の多様なニーズを満たすことと述べている。筆者が保険と共済を理論的かつ機能的な面を中心に研究を行い、公正にかつ丁寧にそれぞれの存在意義を考察し、結論を導いていることに敬服する。

本書の中でも触れられているが、筆者はもともとと保険学者であり、途中から共済にも興味を抱

(A5判/190頁、保険毎日新聞社、22年8月25日発行、税込2420円)